

組合専従になって思うこと

労働者委員 川俣 広孝

私がか社の業務を離れ、鹿児島支部の書記長として組合専従に就任したのは、平成4年6月のことであり、それから四半世紀の間労働運動に関わってまいりました。

もともと、組合専従となる前は、出水営業所の分会委員長にはなっていたものの、会社に入社して10年間は組合活動には全く興味を持っていない中で、年齢が中堅どころとなり、分会副委員長を引き受けて、分会委員長が転勤だからということで（本当は転勤しなかったのですが）その後任を引き受けたもので、分会役員が2年足らずと、全くの素人同様の専従就任でした。

専従になったきっかけは、私どもの組合では部門のバランスをことさら重視する状況にあり、私の所属する配電という部門（街中の電柱やお客様の電気を保守・管理・設計をする仕事）の前任者が職場に復帰することになり、その後任を検討していましたが、適任者がおらず、各分会委員長が緊急に招集を受け、論議することになりました。

その論議では、それぞれの委員から「誰がいい、誰はだめだ、他の部門からではいけないのか」などと様々な意見が出され、そのたびに検討しましたがいずれもだめだということになり、結局論議はこう着状態に陥り、論議してから1時間以上が過ぎようとしていました。

そのとき当時の支部委員長から「川俣お前がやらないか」という突然の提案があり、数人が賛同しましたが、当然私はお断りしました。しかしながら、その後も「川俣でいい」と発言が続き、しまいには「お前が返事しないと皆は帰れないぞ」という脅しもあって、「前向きに検討します」といわざるを得ず、結局押し切られる形で承諾し、そして四半世紀が経過して現在に至るわけです。

25年の間に、会社に二つあった組合が統一するときに副委員長に、その後本部常任として福岡に、10年前に鹿児島に帰ってきて現在の委員長に就任することになりました。

その間に人から言われたこと、自分なりに考えたことをここに書き留めたいと思います。

組合専従の就任当初は、前述したとおり自分の意思で就任したわけでもなく、何で自分なんだろうということでも活動をしていましたので、組合員との飲み会の席でよく「自分の意思でなったわけではない」と愚痴をこぼしていたところ、ある組合員から「だったら辞めればいいんじゃないですか」と切り返され、返す言葉がありませんでした。

それ以来、そのような愚痴は組合員に失礼だと思い、そのような発言は決して組合員の前ではするまいと心に決め、結果的にそのことでこれまでやってこれたのではないかと、今でも思っています。

また、組合をやっていれば、様々な案件で賛成と反対の意見が分かれることがあります。そのたびにどうすればいいのか悩むこともたびたびです。そのときに専従の先輩から、「100人いたら100人の賛同を得る必要はない。最低でも51人から賛同を得られればいいんだ」と教えられ、そのことでだいぶ楽になった記憶があります。

もちろん、100名の賛同を得るために最大限の努力をした結果として、そのように考えるべきであり、最初から51人の賛同で良いという考えでは、かえって多数の賛同が得られないことも多々あることを念頭におかなければなりません。

それから、労使協議において、或いは労使関係においてよく「労使は車の両輪である」といわれます。私はあまりこの言葉が好きではありません。もちろん労使というのは到達するところは同じで、片方の車輪が崩れたら目的に向かって走れないということで、大変大事なことではありますが、一方で車輪の方向が間違えば、目的に到達しないばかりか、脱線することもあるかもしれません。

そこで私は労使関係というのは「アクセルとブレーキ」ではないかと思います。会社がアクセルを踏みすぎで、周りがついて来れない時に、組合がブレーキを掛け速度を緩めたり、一旦停止させたりすることが必要になります。またある時には状況を見ながらも組合がアクセルを踏む必要があるとも考えます。これこそ組合のチェック機能であり、経営参画機能であると考えます。

若い組合員が組合専従に就任するに当たって、どのようにすれば良いのか尋ねられることも多くあります。そのときに私がいつも言うことは「自分を信じれば良いだけだ」ということです。組合専従に指名されたということは、ただ個人が選ばれただけではなく、その人がこれまでやってきたこと、考えていることなど総合しながら選ばれたのであって、これまで自分が経験したことや知識の中で物事を判断すればいいことである。また、判断が間違っただけで指摘されたときには、変われることであれば変われば良いが、変わらないもの、譲れないものであるならば、自分にその場所は合わないのだから、そのときにはあっさり身を引けばいい、と助言します。

また、組合専従というのは誰でも出来ないものですよ、特別な方ばかりだともいわれますが、私はそうは思いません。組合専従は誰でも出来ますし、特別な方がなるわけでもありません。逆に特別な人というのはなるべきではないともいえます。普通の人で普通の判断でやるのが一番理にかなっているものだと私は考えています。少し違うのは他の仕事よりも少しだけ覚悟が必要だということです。組合活動は通常の業務をするよりは、多くの困難や難題が降りかかってきます。そのときに判断は普通で、組合員の前では少しの覚悟をもって対峙する事が大事です。なぜかといえば、集会等では声の大きな組合員の意見に全体が流されていきがちです。賛同する人はあまり声を上げませんので、間違っただけで議論が進みがちになります。そこで勇気と覚悟を持って対処することが求められます。そのことが出来るようになれば組合専従の仕事はそれほど苦にならないと思います。

だらだらと私の経験や考えを述べてまいりましたが、また、組合の一部の方にしか参考にならなかったかもしれませんが、組合専従ではなくとも組合役員をされている方にとっても参考になればと思い記載してみました。

是非、「おまえも専従をしてみないか」と誘われたら、勇気を持ってこの世界に足を踏み入れてください。お待ちしております。